

チョコレートキャッスル
2018年3月公演

スパイゲーム

決定稿

島田洋樹

人物

鈴木柚音 (18)

大学1年生。浩一の従妹。

原田加奈 (21)

大学4年生。浩一と付き合っていた。

大熊始 (22)

大学4年生。理沙と付き合っている。

西方梨沙 (22)

大学4年生。大熊と付き合っている。

鈴木浩一 (享年20)

大学2年生で死亡。柚音の従兄。

刑事

		呼ばれる側				
		柚音	加奈	大熊	梨沙	浩一
呼ぶ側	柚音	わたし	加奈さん	くまさん	梨沙さん	おにいちゃん
	加奈	ゆず	あたし	くま	梨沙	浩一くん
	大熊	ゆずちゃん	原田	ぼく	梨沙	ずっきー
	梨沙	ゆず	加奈	始ちゃん	ウチ	ずっきー
	浩一	柚音	加奈ちゃん	くま	西方	おれ

●開演前

客入れ曲ナシ。

柚音、加奈、梨沙、大熊がスパイゲームをやっている。

円周上に、等間隔で座っている。

GMは演台で立っている。。

●開演キュー

開演前に行っていたゲームをキリのいいところまで行う。

暗転

S、川の流れ、救急車、警察

警察声 「崖下に車を発見！ 中に人がいるのが確認できます！ 至急応援をお願いします。 崖下に車を発見！ 中に人がいます。 至急応援を……」

●第1ゲーム

明転

GM…柚音

目的…観客へのスパイゲームの説明 & 人物紹介
スパイ…加奈

柚音 「今、わたしたちがやっていたのが、『スパイゲーム』というレクリエーションです」

大熊、加奈、梨沙、目を瞑ったり伏せたり。

柚音 「GM、つまりゲームマスターは1ゲームごとに交代します。このGMは、ゲームには参加せず、司会者の立場として、中立にゲームを回します」

柚音、3人の周りをグルグル回る。

梨沙 「キンチョーする!!!」

大熊 「意外にな」

梨沙 「そう?」

大熊 「ああ?」

梨沙 「キレイなくても……」
加奈 「自分に来るんじゃないか自分に来るんじゃないか……っていうね」
大熊 「それ、ドキドキ」
梨沙 「あんまないなあ」

柚音 「(3人に)ちよとうるさいなあ。GMがこの中の誰か一人の肩を、叩きます」

柚音、梨沙の肩を叩く。

梨沙 「あっ」
加奈 「え、なに」
大熊 「え、おまえ叩かれた？」
梨沙 「……。エ？」
加奈 「……これ完全に叩かれてるね」
梨沙 「……ア？」
大熊 「ウソだろ、信じられん」
梨沙 「ねえひっどい！ 彼氏でしょ？ 保護してよ！」
加奈 「認めちゃった」
梨沙 「だってゆずちゃん、急に叩くんだもん。びっくりしちゃう」
柚音 「そういうゲームだから！」
加奈 「何回このゲームやってんのよ」
大熊 「誰が予告して叩くんだよ」
加奈 「ちよっと今から叩いてもいいですかって」
大熊 「ってかおめ、保護ってなんだよ！ 擁護な！ スルーするところだったわ」
梨沙 「言葉のことはいいよ今！」
大熊 「危なかったわあ」
加奈 「ごめんねえ、ゆずちゃん。もっかい選直してもらっていい……？」
柚音 「マっすか」
大熊 「すまん。梨沙を叩く場合は予告してやってくれ」
柚音 「分かった任せて」
梨沙 「ふえええええ、ごめんなさあい、お願いします」
大熊 「わりいなあ」
柚音 「ドンマイっすよ、梨沙さん」
加奈 「じゃああたしたち」
柚音 「もう一回伏せてもらって……」
大熊 「オッス」

大熊、梨沙、加奈、目を瞑ったり伏せたり。

柚音、グルグルグルグル回る。

柚音 「当然、GM以外は、誰が肩を叩かれたかは知ってはいけません。なぜなら、肩を叩かれた者は……」

柚音、加奈の肩を叩く。

柚音 「スパイとなるからです」

大熊、加奈、梨沙、目を開けたり起きたり。互いに顔を見合わせたりする。

柚音 「このゲームは、GMを除く参加者が、『誰がスパイなのか』を見破る、というゲームです」

梨沙 「スパイ、誰？」

梨沙、加奈を指す。

加奈、否定する。

梨沙、大熊を指す。

大熊 「人を指すなよ」

梨沙 「あ、ごめん」

梨沙、指を引っ込める。

柚音 「3分間の話し合いで、誰がスパイなのかを決めます。何を話すかは自由、

全く決まっています。とにかく会話をして、叩かれた『スパイ』を見つければいいのです。3分後にいつせーのせ、でスパイだと思う人を指さします。

スパイは当然自分を指ささないで、自分以外の二人がスパイを指さしたら、即ちスパイであることを見破られたら、スパイの負けとなります。では、どうぞ」

梨沙 「わたしスパイじゃない」

大熊と加奈、顔を見合わせる。

梨沙 「え、なに？ 信じてないの？」

大熊 「いや別にそんなことねーけど」

加奈 「すごい初っ端に宣言するよね」

梨沙 「だって、違うもん。わたしスパイじゃないもん」

加奈 「え、なに？」
梨沙 「わたし、スパイじゃない！」
加奈 「(大熊に) この人、ふだん『わたし』って言わくない？」
梨沙 「え」
大熊 「あく！ 確かに！」
梨沙 「ややや！ 言う！ わたしともウチとも言うよ」
加奈 「怪しい」
大熊 「怪しいな」
梨沙 「そんなあ…… だって、あ、そう！」
大熊 「必死」
梨沙 「ウチ一回前に叩かれてるから！ ゆずに」
加奈 「さっきのね」
大熊 「声出しちゃった」
梨沙 「こそ！ だから連チャンってことはないっしょ。予告もされてないし、ねえ？」

梨沙、柚音を見る。

柚音 「ちよつと何言ってるか分からない」
梨沙 「なんでよ」
柚音 「いや、予告なんてするわけじゃないですか。梨沙さんあほだったのですか」
梨沙 「あほ。あほじゃないです」
柚音 「あほじゃないですか」
梨沙 「あほじゃないです(同じ感じで)」
柚音 「いや、あほでしょ」
梨沙 「あほじゃないです(同じ感じで)」
柚音 「あほでしょ」
梨沙 「あほじゃないです(同じ感じで)」

加奈、止める。

加奈 「ちよつと！ これ(このやりとり)がもう怪しいよねえ(大熊に)」
大熊 「それ」
梨沙 「え！ じゃあどうすれば信じてくれるの……!!?」
加奈 「うわ、怪しい」
梨沙 「なんでも怪しむ！」
加奈 「なんでも怪しいんだもん」

大熊 「それ of それ」
梨沙 「だってウチほんとに、マジで、マジよマジで違うから」
大熊 「ああ（相槌）」
梨沙 「スパイじゃないから!!!」
加奈 「叫ぶなよ。実に怪しいね」
梨沙 「なんでええええ」
加奈 「でもおお」

加奈、大熊を指さす

大熊 「指すな、指すな」
加奈 「あんたも怪しい」
大熊 「亾キタコレ」
梨沙 「（加奈に）なんでなんでなんで？」
大熊 「（梨沙に）ア？」
梨沙 「ウチから疑いが逸れるならいいんだけどお。ってかそもそもスパイじゃないし！」

加奈 「（無視して）くまさ、喋らないよね。さっきから全然」

大熊 「ア？ そうか？」

梨沙 「確かに！ 静かめかも！」

加奈 「あそれ、とか、な、とかしか言ってなくない？」

大熊 「ンなことねえよ。ほら、喋ってんだろ」

梨沙 「怪しい！」

大熊 「どこがだよ！」

梨沙 「喋らないことが」

大熊 「じゃあ分かったよ、喋ってやるよ。ほら、何でも言ってるよ、なに喋ってほしいんだ？」

梨沙 「うわあ、ムキムキになってる〜」

大熊 「ムキが一個多い」

加奈 「なってるない！」

梨沙 「じゃあ、ウチの目を見て」

大熊 「ア？」

梨沙 「目を見て、言ってる。『スパイじゃないです』って」

大熊 「目を見て??？」

梨沙 「いいから」

大熊 「アアア??？」

梨沙 「言えないんだ。じゃあスパイだね（加奈に）」

加奈 「だね」

大熊 「はああ？ 言えるわ、スパイじゃねえもん」
加奈 「じゃあ、やって？」
大熊 「(舌打ち) なんなんだよ」

大熊、しぶしぶ梨沙の目を見つめて

柚音 「行くよ？ 『ぼくはスパイではありません』」
大熊 「(復唱して) ぼくはスパイではありません。でいい？」
柚音 「もう一個」
大熊 「まだあんのかい」
柚音 「ぼくは梨沙のことを愛しています」
大熊 「(復唱) ぼく梨沙のことを愛してええええい！！」
梨沙 「ちよっと！！」
大熊 「はああ？」
加奈 「ごまかすなよ」
大熊 「なんだよ愛って。ぼくは直江兼続か！ あほ！」
梨沙 「あほじゃないです」
大熊 「あほだろ」
梨沙 「あほじゃないです」
加奈 「そのくだりも面白いから！ さっきやったでしょ」
梨沙 「もうスパイかスパイじゃないかなんかどうでもよくない？」
大熊 「それを当てるゲームだよ！」
加奈 「面倒くさいな、このカップル」
梨沙 「愛だよ、愛なんだよ。そう一言言えばいいんだよ？」
大熊 「はあ？ V6かよ」
梨沙 「意味わかんないんだけど！」
大熊 「分かるだろ！！」
梨沙 「愛してる、っていえば済むんだけど。なんで言わないの！」
大熊 「なんでスパイゲームで愛してるって言わなくちゃ」
梨沙 「スパイゲームとか関係ないんだけど」
大熊 「だって今スパイゲームの最中なんだけれど！」
梨沙 「言えばいいじゃん！ 言って終わり！ それでウチも始ちゃんもスパイじゃない、完！ いいじゃん」
加奈 「……はあ???’」

3分のアラームが鳴る。

大熊 「いやそうなんだけど！」

柚音 「はい終了〜」
加奈 「何今の何の時間だったの!？」
大熊 「さっぱりわからない」
梨沙 「なになになが」
大熊 「なにか『なになになが』だよ」
加奈 「なになにながにながうるさいなあ! イチャイチャしおって!」
大熊 「あれ、彼氏」
加奈 「別れたよ!!!」
柚音 「あノアのあの、皆さん……イチャイチャしないでください」
加奈 「わたしはしていない」
柚音 「スパイを当てるゲームなんで! これ! ちゃんと誰がスパイか考えてました!？」

梨沙、口を尖らす。

大熊 「全然分かんないや」
柚音 「えー! これデモンストレーションの意味もあつたんですけど!」
大熊 「もう一回やろう」
柚音 「やらんわ」
加奈 「キミらどつちかでしょ、これはもう」
梨沙 「何だよ、違うって!」
大熊 「(二人で考えて) いや、もう何も分かんないよ」

梨沙、ほかの二人を見比べている。

柚音 「はい、じゃあスパイだと思う人は、……せーの」

3人、指しかける。

柚音 「と言ったら指してください」
加奈 「(ずっこける) でた!」
梨沙 「もおお」
大熊 「高校の先生がよくやるやつ〜!」
柚音 「いや、知らんけど。はい、じゃあスパイだと思うのは。せーのっ」

大熊 ↓ 加奈に
梨沙 ↓ 加奈に
加奈 ↓ 梨沙に

大熊 「誰、誰」
加奈 「誰でしょうかねえ」
梨沙 「ウチではない」
柚音 「じゃあ。スパイは誰ですか！」

間

加奈 「はい、あたしです。(みんなが当たったことに対し) まじかああ」

大熊、梨沙、立ちあがってハイタッチ。

大熊 「卍！(ポーズ)」
梨沙 「卍！(ポーズ)」
梨沙 「やっつっつぱり！！」
大熊 「回してたもんなあ」
梨沙 「やっぱり加奈じゃん」
加奈 「ま、正直回してたよね」
大熊 「だろ？」
梨沙 「回してたねえ」

わちやわちや

柚音 「はいっ、とまあこんな感じで、ざっくばらんに話しながら誰がスパイなのか、を見破るゲーム？ です。まあ別に、負けたからって何かあるわけでもないんですけどね。(3人の方へ向き直って) でもこれ不思議と、なんか分かるときは分かるよね。今みたいに」
梨沙 「ねえ！ なんでか分かんないけど、分かるよねえ」
加奈 「くっそ」
大熊 「(梨沙に) おまえやる前から分かっちゃったしな」
梨沙 「それはもういいじゃん」
柚音 「じゃあ、もう次やりましょう、次」
加奈 「ああ、あたしか。GM(立ち上がる)」

柚音、加奈が座っていた席に座る。

加奈 「次、どうしよっか」
柚音 『『どうしよっか』って？ なんかやるの』
加奈 「いや、普通にやるけど」

柚音 「なんだよ」

●第2ゲーム

GM…加奈

目的…事件の導入

スパイ…大熊

加奈、ぐるぐる。

大熊 「この時間、やっぱそわそわするな」

梨沙 「ね」

大熊 「なんかしかも、原田がGMだと、あれだな」

梨沙 「わかるく、なんか、ね」

加奈 「どれよ」

柚音 「なんか緊張する」

加奈 「しないでよ」

梨沙 「すべてを見通してそう」

大熊 「GMなんだからすべてを見通してるんだよ」

柚音 「やっぱあほじゃないですか」

梨沙 「あほじゃないです(ちよっとさっきと違う)」

柚音 「違うなあ」

大熊 「仲ええなあ」

梨沙 「これあれだ」

大熊 「あれ？」

梨沙 「あれに似てるから緊張するんだよ」

柚音 「あくく、あれですね」

梨沙 「そうそうそうそう！ ね！ あれ」

大熊・加奈 「どれだよ！」

梨沙 「え、あれですよね？ ぐるナビ」

柚音 「ビ！？」

大熊 「食ベログみたいなやつでしょそれ」

梨沙 「ん？」

柚音 「あの、梨沙さん…あほなんですか」

梨沙 「あほじゃないです！」

柚音 「は？」

梨沙 「え、ウチが思ったのは、あの…料理の値段当てるやつ。ナイナイとか

渡辺直美が」

加奈、大熊を叩く。

大熊・柚音 「そうそうそう!!」

加奈 「グルナイでしょ? ナビじゃなくて」

梨沙 「んんんん?」

柚音 『んんんん?』?」

大熊 「なんで分かんねんだ!」

柚音 「どっからナビ出てきたんですか」

梨沙 「あああ、確かに、そう言われれば、ナインティナインだからぐるナイか」

大熊 「そうだよ」

加奈 「はい、叩いたよ〜」

梨沙 「なんだって」

大熊 「やっと思が開けられる」

加奈 「はい、じゃあ目を開けてください」

大熊、梨沙、柚音、目を開けて互いを見回す。

加奈 「じゃあ、話し始めてください。スタート」

間

梨沙 「あ、ウチさあ」

大熊 「あ? 何? スパイなの?」

梨沙 「ちくが〜う〜! ウチはスパイじゃないよ! って宣言しようと思って」

柚音 「そういうゲームだからね」

梨沙 「そうなんだけど!」

柚音 「え、実際……スパイですか? (梨沙に)」

梨沙 「ウチ?」

柚音 「はい」

梨沙 「違うってば」

大熊 「なんで? 理由は?」

梨沙 「理由???」

大熊 「何でスパイじゃないって言えるの?」

梨沙 「だって、……え、スパイじゃないもん」

大熊 「だから、なんで?」

梨沙 「そんな……理由なんて言われてもスパイじゃないもんはスパイじゃない……」

…

柚音 「逆に、くまさんは？」
大熊 「ぼく？ ぼくは違げえよ。だって叩かれてねーもん」
梨沙 「なにそれ！ そんなん当たり前じゃん」
大熊 「そう言えばよかったやん」
柚音 「まあ、わたしも叩かれてないんで……」
梨沙 「え、じゃあうちの誰も叩かれてないんじゃないん」
柚音 「そういうことになりますね」
梨沙 「つてことは……？」
柚音 「はい……そういうことになります」

柚音、大熊、梨沙、お客さんの一人を指さす（きつと）。

加奈 「いやいやいやいや！ 叩いたわ」
梨沙 「誰を」
加奈 「言わんわ」

柚音、大熊、梨沙、先ほどと同一の人を指さす（ゆっくり）。

加奈 「その人ではないよ」
梨沙 「じゃあ、誰……」
加奈 「それを当てるゲーム」
柚音 「困りましたね」
大熊 「え、ゆずちゃん」
柚音 「はい」
大熊 「ゆずちゃんはちやうの？」
柚音 「わたしですか？ ないない！」
大熊 「じゃあ、そうなんだろうな」
梨沙 「ちよつとちよつとちよつと！」
大熊 「なんだよ」
梨沙 「甘くない!?!」
大熊 「ああ？」
梨沙 「わたし違います、でOKなの？」
大熊 「だってそれ以外どう言うんだよ」
梨沙 「え、イジメ？ 新車のデートDVですか」
大熊 「おい、可愛い後輩疑うのか」
梨沙 「疑つてよ！ そういうゲーム！」
柚音 「ヒドい……!! わたしのこと、疑うんですか？」
梨沙 「そういうゲームだから！」

柚音 「ひどい！ オヤジにも疑われたことないのに！」

シーン

柚音 「(滑ったことに) え？」

大熊 「ごめん、ちよっと聞き取れなかった」

梨沙 「お父さんに疑われたことないの？」

柚音 「やめてください、恥ずかしいので」

梨沙 「ってか、オヤジっていうんだね」

柚音 「いや、言わない」

梨沙 「いまオヤジって」

柚音 「ごめんなさい、自分が愚かでした」

梨沙 「？ なんで謝るの」

大熊 「まあまあ、知らないとね、こうなるよね」

梨沙 「ええ？」

大熊 「うん。今のゆずちゃんの」

梨沙 「ああ、ガンダムか！ 聞いたことあると思った！」

柚音 「恥ずかしい……」

梨沙 「ゆずちゃん、ガンダム好きなの？」

柚音 「あ、や、別に好きじゃないですけど……そのセリフくらいは知ってます」

梨沙 「そっか、有名なセリフだもんね。オヤジにも疑われたことないのに！」

大熊・柚音 「いやいやいやいやー！」

大熊 「殴られたことないのに！ でしょ」

梨沙 「え、え、え、え??？」

加奈 「嘘でしょ」

梨沙 「(加奈を見) ちょっとなにDM!」

加奈 「『オヤジにも』発言に対して) あほすぎるでしょ」

大熊 「DM!??」

梨沙 「え？ あ、ごめん」

柚音 「ダイレクトメッセージ!? GMです、GM」

大熊 「なに普通にミスってるんだよ」

柚音 「ホント気をつけて」

加奈 「気付かなかった……」

梨沙 「普通にミスりましたごめんなさい」

大熊 「気をつけて」

梨沙 「はい」

一拍

柚音 「で、ええと」
大熊 「閑話休題」
柚音 「なんでしたっけ」
大熊 「ええと……ほら、(梨沙に) 変なボケ入れるから」
梨沙 「ごめんなさい、もう間違えません」
加奈 『オヤジにもく〜』のくだりです」
大熊 「あ、そうだ」
梨沙 「そうそう」
柚音 「なんかそれも変なふうにボケてましたよね」
梨沙 「いやボケたんじゃなくて」
大熊 「おまえ中途半端なボケに中途半端なボケをこう(手をつけながら) 重ねっ
からもう話のフローがわけ分からねえじゃん」
梨沙 「えええええ」
柚音 「自粛してください、発言」
梨沙 「発言！？ そこまで」
大熊 「会話が(訳分らないことになる)」
梨沙 「ひどい」
加奈 「ひどい責められようだ」
大熊 「なんか、今さらぶり返すのもアレだけど、『オヤジにも殴られたことないの
に』な」
梨沙 「ああああ!!」
柚音 「え？」
大熊 「え??」
柚音 「え?? ぶたれたことないのに、ですよ」
大熊 「え??」
柚音 「わ、ニワカだ……」
大熊 「やめて、冷ややかな目！」
梨沙 「なんで聞いたことあったんだろ」
大熊 「あん？」
梨沙 「今のセリフ。ガンダムの」
柚音 「聞いたことも何も、有名ですからね」
大熊 「ずっきーだろ」
柚音 「！」

一拍

加奈 「……あああ、そうだそうだ」

梨沙 「そっか、ずっきーか」
柚音 「……ずっきー??」
大熊 「ガンダム好きじゃなかったっけか、あいつ」
梨沙 「好きだった好きだった」
加奈 「っていうか、サンライズ全般?」
柚音 「誰ですか」
加奈 「そりゃ、ゆずは知らないよね」
大熊 「懐かしいな」
梨沙 「……そうだね」
加奈 「2年も前だもんねえ」
梨沙 「もうそんなになるかあ」
大熊 「そうだなあ……早いな」
加奈 「ここにいってもよかったのにね」
柚音 「え、え、え」

間

しんみりした感じ。

加奈 「あ、なんかごめん……」
柚音 「え、ちよっとなんですかこの空気!」
大熊 「すまん、ちよっと昔のことを思い出して」
梨沙 「しんみりしちやったねえ」
柚音 「え、急に!?! 誰ずっきーって!?!」
加奈 「あああああああ!!!」
柚音 「今度は何!」

加奈、タイマーを持ち出して

加奈 「時間、とっくに過ぎてた……」
大熊 「だよね!?!」
梨沙 「ウチも長いなって思ってた」
加奈 「7分53秒……」
柚音 「だいぶですね」
大熊 「盛大に……」
梨沙 「え、と、どうするのどうするの」
加奈 「あ、じゃあ、もう早くスパイ決めて!」
大熊 「マジで!?! 全然スパイにつながるようなトークしてない」
加奈 「いや、イケる。あたし分かった」

梨沙 「すごい」
大熊 「GMだから！」
梨沙 「それな！」
大熊 「あん!？」
加奈 「はい、決めて決めて〜」
柚音 「厳しくないですか！」
加奈 「厳しいでしょう」
大熊 「天気予報みたいに言う!？」
加奈 「言ってないわ！」
梨沙 「え、もう決めていいの? じゃあ、ウチゆずちゃん(柚音を指す)」
大熊 「自由か!」
柚音 「(指されたことに対して) ちょっとなんで!？」
梨沙 「もう勘、勘」
柚音 「なにそれ〜」
加奈 「ちよつと待って! まだ指してとか言っていないじゃんんで指すの!」
大熊 「勝手にやるな」
梨沙 「ひいひい」
加奈 「じゃあいくよ、せー」
大熊 「待って、ぼくまだ」
柚音 「もういいですよ、勘で!」
大熊 「そういうテンション!？」
加奈 「はい、いくよ、スパイは〜〜 せーの」

柚音↓大熊
大熊↓梨沙
梨沙↓柚音

4人 「おっっ!」
加奈 「割れた」
大熊 「まあ、ほぼ勘だからな」
加奈 「それもそうか」
柚音 「スパイゲームとは」
大熊 「それな」
加奈 「今回は良くない回だった」
大熊 「それGMが言う!？」
加奈 「おう、みんな、次回は気を引き締めてこうな」
大熊 「GM言う!？」
柚音 「ホントですよ! もう〜!」

加奈 「で、まあ、もうスパイが誰かとかよう分かんなくなっちゃったけど」
梨沙 「もうこれ今回は、水に流しますか」
柚音 「それはアリ」
加奈 「アリ寄りのアリですね」
柚音 「じゃあ、次のセット行きますか」
梨沙 「そうしましょそうしましょ」
加奈 「気を取り直してね」
梨沙 「ツシヤア、次は頑張るぞ」

大熊以外、立ち上がりかける。

大熊 「いやいやいやいや!!」
梨沙 「? なに、始ちゃん」
大熊 「いやいやいやいやいやいや!!」
柚音 「何が嫌なんですか」
大熊 「いやいやいやいやいやいや!!」
加奈 「なに!!」
大熊 「ぼくだから!!」
梨沙 「? 何が?」
大熊 「スパイ!!」

一拍

柚音 「ア、ソウナンデスカー」
加奈 「そうだ、そういえばくまでしたー」
大熊 「そんな感じ!? え、おれ、スパイなんだけど!!」
柚音 「あ、はい」
大熊 「ゆずちゃん、ぼく指してたよね!? あってたんだよ!? もうちよつと喜んで」
柚音 「あ、でも勘なんで、別に(冷笑)」
加奈 「はーい、じゃあ次のセットはくまDMね」
大熊・柚音・梨沙 「GM!!」
加奈 「ごめん、さすがに今のはわざと」
柚音 「ですよねえ」
加奈 「はい、次いくよー、立って立って」
大熊 「え、嘘だろ。ぼく勝者だよね? 今のゲーム勝ったよね???」

加奈、大熊を立てせる。

大熊 「まじで!?? え、こんなどんな気持ちで次肩叩けばいいの」

梨沙、柚音、ハケる。

し、溶暗していく。

大熊 「え、ちよちよちよつとどこ行くどこ行く。そっちはハケじゃあ」

柚音 「千鳥!？」

大熊 「これから次のセットじゃあ」

加奈 「あ、いや」

加奈もハケる。

大熊 「加奈ああ」

加奈 「もうノブいいから」

大熊 「え、どこ行くの。次のセット」

加奈 「あ、や、次、断章だから……」

大熊 「あ、そうだった」

加奈 「しっかりしてよ」

大熊 「ごめん、動揺してた」

柚音 「大丈夫ですか、先が思いやられますわ」

大熊、ハケる。

し、暗転しきる。

●断章1

し、明転。

2016年秋 事故後

刑事と柚音が向かい合って座っている。

柚音の横には、浩一の遺留品が置いてある。

刑事 「浩一さんは、転落の衝撃で肋骨が折れ、それが臍臓を傷つけたことによる、

出血性ショック死でありました……なので、即死ではなく、1〜2時間ほど
かかり、じわじわと死んでいったのだと推察されます」

柚音 「……え？」

刑事 「あ、はくい。ですから、転落の衝撃で肋骨が折れ、それが臍臓を傷つけた

ことによる、出血性ショック死で、即ち即死ではなく……」

柚音 「いや、聞こえてます聞こえてます」

刑事 「は〜い」

柚音 「ごめんなさい、ちょっとさっきまでわちゃわちゃしてたもんで、一回落ちてきます」

刑事 「は〜い」

柚音 「あ、ごめんなさい、こっちの話です」

刑事 「は〜い」

柚音、刑事を見る。

柚音、深呼吸。

刑事 「は〜い」

柚音 「ちよつとその』は〜い』ってのやめてもぶっつてらるんですか」

刑事 「は〜い」

柚音 「それ!!!!!!」

刑事 「は、は〜い」

柚音 「それです、それ!」

刑事 「はい」

柚音 「だからそれ!!! ……」

刑事 「はい?」

柚音 「ごめんなさい」

刑事 「……はい」

柚音 「……はあい(一息)」

刑事 「あ、あ、あ、あ、あ!」

柚音 「や、今のは良いでしょ! 溜息ですよ」

刑事 「は〜い」

柚音 「それ!!!!!!」

間

刑事 「落ち着きましたか?」

柚音 「(腑に落ちない感じで) ……まあ?」

刑事 「よかったよかった」

柚音 「え、と、で、なんでしたっけ」

刑事 「え?」

柚音 「何の話なんでしたっけ」

刑事 「ああ、普天間基地の移設」

柚音 「(無視して) これ、遺留品ですよね……」
刑事 「(すかさず) そうです」

柚音、遺留品を漁る。靴、財布、バッグ、タバコの箱、ライター、ガンダムの何か(プラモデルか)など。
柚音、遺留品の中からスマホを取り出す。
柚音、スマホの電源を入れようとする。

柚音 「(電源が点かないことに) あれ、あれ」
刑事 「……ああ、スマホ、壊れてますよ」

柚音 「え」

刑事 「スマホは、川の中に落ちていたそうです。崖から転落したはずみで川に飛び出したのでしょうか」

柚音 「え……」

刑事 「あるいは、落下した衝撃で壊れたのかもしれませんが」

柚音 「あの……」

刑事 「はい？」

柚音 「キャンプ場を出発したのって、その……8時半くらいなんですよね」
刑事 「被害者が、ですか？」

柚音、頷く。

刑事 「そういう話です」

柚音 「……」

刑事 「なにか？」

柚音、沈黙している。

刑事、それを見て一息つく。

刑事 「不幸な、事故でしたね……」

柚音 「………事故」

刑事 「ええ」

柚音 「キャンプ場を出たのが8時半ってことは、事故に遭ったのが」

刑事 「だいたい8時45分ころではないかと」

柚音 「……そのときにスマホが壊れたんですよ」

刑事 「おそらくそうでしょう。……何か？」

柚音 「………8時45分までは、スマホは生きていた」

刑事 「? なにか？」

柚音 「……………あの、思い付きで喋るだけなんで、まだ、その、分かんないんですけど」
刑事 「は〜い……………あ、はい。ごめんなさい」
柚音 「もういいですよ」
刑事 「はい。え、と、で」
柚音 「あ、その」
刑事 「はい」
柚音 「思いついたんで言うんですけど、……………ホントに事故、でしょうか!？」

刑事、目を丸くする。

刑事 「事故、ですよ」
柚音 「間違いなく？」
刑事 「はい。運転ミスです。アルコールも全く検出されていない」
柚音 「……………お酒、飲めない人でした」
刑事 「そうでしたか」
柚音 「……………」
刑事 「……………何か、気になることでも？」
柚音 「ちよつと、待ってください……………整理したいんです」
刑事 「は〜い」

し、暗転

●第3ゲーム

GM…大熊
目的…事件の萌芽（加奈）
スパイ…加奈

大熊が立ち、他の3人は着席している。

大熊 「ふう、ついにぼくのターンか」
加奈 「そうだよ、なにニヤついてんの」
大熊 「ニヤついてないわ」
加奈 「あーそ」

大熊と加奈、席を交代する。

大熊 「じゃあ、もうてきぱき行くぞ」

柚音、加奈、梨沙、目を瞑る。

大熊、ぐるぐる歩き回る。

大熊、加奈にタッチ。

大熊 「はい、タッチしました」

3人、目を開ける。

大熊 「はい、スパイ会議始めてください」

3人、互いを牽制して中々口を開かない。

大熊 「見合ってるねえ」

加奈 「(柚音と梨沙に) スパイ……誰？」

柚音 「スパイ……… (加奈に) 加奈さんですか？」

加奈 「はい？」

柚音 「みんなの友人が死んだ。そのスパイは、あなたですか？ 加奈さん」

加奈 「なんの話？」

柚音 「梨沙さんたちの友達が死んだことです」

加奈 「……………」

柚音 「それは、さっき言っていた、『ずっきー』という人のこと、ですか？」

加奈、梨沙、顔を見合わせる。

梨沙 「……そうだよ」

柚音 「ずっきーさん……」

梨沙 「サークルのね、ウチらの同期」

柚音 「亡くなったんですか？」

加奈 「(頷いて) ずっきーはね、2年前に、亡くなったの」

柚音 「亡くなった」

加奈 「事故でね」

柚音 「事故……」

梨沙 「そうだよ、崖から落ちてね」

大熊 「ちよっと」

柚音、梨沙、加奈、大熊を振り返る。

大熊 「(みんなが振り返ったことに)！」
柚音 「なんですか」
大熊 「いや、その話、する……?」
梨沙 「……そうねえ」
加奈 「別に今話さなくても、いいのかもねえ」
柚音 「いや、話しましょう」
大熊 「おいおい」
加奈 「ええ〜、だって死人の」
大熊 「関係ないっしょ、このゲームに」
梨沙 「そうだよ〜 ずっきーのことならまた今度、ちゃんと話せるから」
柚音 「……なるほど! それもそうですね」

大熊、梨沙、加奈、見合わせてほっとする。

柚音 「じゃあ、梨沙さん」
梨沙 「はい!」
柚音 「あなたは?」
梨沙 「?」
柚音 「スパイなんですか?」
梨沙 「違うよ! ウチはスパイじゃないよ! なぜなら、叩かれてないから! (どや顔)」
柚音 「じゃあ、わたしも叩かれてないんで、スパイは加奈さんですね。消去法で」
梨沙 「確かに!」
加奈 「え、なにに急に! ぐいぐい来る」
柚音 「さっきみたいに勘に頼りたくはないじゃないですか」
梨沙 「さっきのは大変だったねえ」
柚音 「ホントにね」
加奈 「それは分かる。でも、叩かれたか叩かれてないかで言えば、あたしも叩かれてませんけど?」
梨沙 「なんですと!」
柚音 「じゃあスパイじゃないっていうんですね」
梨沙 「(加奈に) いうんだな?」
加奈 「そう!」
梨沙 「(柚音に) スパイじゃないらしいよ」
柚音 「へえ。じゃあ、ずっきーさんが亡くなったことには関わってないんだ?」
梨沙 「(加奈に) どうだ? 関わってないのか? ……え?」
加奈 「……。はいはい。関わってないよ」

柚音 「じゃあスパイじゃないんだ」

加奈 「そうだってば！」

柚音 「梨沙さんは？」

梨沙 「へ？」

柚音 「ずっきーさんの事故死に、関わってますか？」

梨沙 「うーくん……」

柚音 「スパイなんですか？」

梨沙 「あ、加奈はね」

加奈 「は？」

梨沙 「付き合ってたよ、その人と。鈴木浩一さんと」

加奈 「ちよつと、なに、なんであたし出すの！」

梨沙 「ねえ、怪しくないですか？ スパイじゃないですか？？」

柚音 「え！ え？？？ 恋人？ え、恋人……？ ずっきーさんと？？ え、じ

やあ恋人がなくなっただんですか？？」

梨沙 「そうだよお」

加奈 「ちよつとちよつと」

梨沙 「スパイに違いない」

加奈 「意味わからないし違うから！」

柚音 「ずっきーさんと付き合ってた、ってことですか？」

梨沙 「そうなんだよー」

加奈 「いやいやいや、なにを大ぼらを」

梨沙 「ほらじゃないじゃん」

加奈 「そうだけど、そうじゃないじゃん！ ってかなに陥れようとしてんの！

梨沙の方がよっぽどスパイなんじゃないの！ そういうことするの！」

柚音 「せいせいせい。落ち着いてください」

加奈 「落ち着いてるわ」

柚音 「え、大ぼらなんですか？」

梨沙、にやにや笑っている。

加奈 「何笑ってんの！（柚音に）ほらゆずちゃん、コイツ怪しい！」

梨沙 「ちよつとやめてよお」

柚音 「もうなになになに」

加奈 「いや、なんかいいんだけど、いいんだけどさ」

梨沙 「スパイなんだろお？ スパイなんだろお？」

加奈 「ちゃんと伝えなさいよ！」

柚音 「なんぞなんぞ」

加奈 「だあああ！ 付き合ってたけど、ずっきーとはね！ それは、事故のとき

より前！ 事故のときはもう別れていました！

柚音 「はああああん」

加奈 「はああああんて」

梨沙 「付き合っただいたんじゃん」

加奈 「そうだよ、いや知ってたでしょうが」

梨沙、Vサイン。

加奈 「ピースすな」

柚音 「ずっきーさんは、元恋人」

加奈 「そういうこと」

柚音 「なんで別れちゃったんですか」

加奈 「え」

柚音 「元恋人ってことは、別れたってことですよね」

梨沙 「そうだねえ」

加奈 「突っ込むのねえ」

柚音 「恋バナ、好きなんで」

加奈 「……ええ」

梨沙、にやにやしている。

加奈 「(梨沙を見て) なにをにやにや」

梨沙 「だって知ってるんだもん」

加奈 「そうだよねえ」

柚音 「え、梨沙さんも知ってるんですか？」

梨沙 「うん、もちろん」

柚音 「もちろん!?!」

加奈 「サークル内部のことだし」

梨沙 「少人数だからね、嫌でもねえ」

柚音 「はああああん。なりゆほりよ」

梨沙 「浮気してたんだよ、ずっきー」

柚音 「浮気! 穏やかじゃない!」

加奈 「(梨沙に) なんであんたが言うの!」

梨沙 「言いたくなっちゃった」

柚音 「浮気は、よくないですねえ」

梨沙 「良くない良くない」

柚音 「そりゃ、別れるに値しますよねえ」

梨沙 「値する値する」

加奈 「うん。でもそれだけ」
柚音 「それだけ？ 浮気する・されるっていうのは大きな問題では？」
加奈 「だから、それで別れたんだよ。それだけ」
梨沙 「それだけ？」
加奈 「それだけでしょ？」
梨沙 「いや、それは知らないけれど」
柚音 「あ、わかった。やっぱりスパイ加奈さんでしょ？」
加奈 「はあ？ なんでそうなるのよ」
梨沙 「なんでなんで？」
柚音 「浮気しやがって〜！ ムキーンッ！ 殺してやる！ ぐさって、殺しちやっただ」
加奈 「……はい？」
梨沙 「いやいやいや、ゆずちゃんよ、早合点だよ」
柚音 「なぬ？」
加奈 「あのねえ、殺されたんじゃないよ、事故死だって。言ったじゃない」
梨沙 「そうそう」

柚音、ハツとして考える（つつい自分の推論が先立ってしまった）。

柚音 「そうでした」
梨沙 「そうだよ」
加奈 「車運転してて、崖から下に落ちちゃって」
梨沙 「穏やかじゃない！」
大熊 「（タイマーを持って）はい終了〜」
柚音 「ああああああん」
加奈 「言っておくけどあたしじゃないですからね！」
梨沙 「フラグみただよ」
加奈 「あ」
柚音 「たしかに〜」
大熊 「ちよつと珍しく原田が押されてたね」
加奈 「そう！ ホントに！ この子がぐいぐい来る！」
柚音 「すみません可愛くて」
加奈 「なんだこいつ」
大熊 「かわいい〜」
梨沙 「（大熊に）ちよつと〜！」
大熊 「え？」
梨沙 「鼻の下伸ばさないで」
大熊 「あ、伸ばしてないです。はい、じゃあ、スパイはせーのっ」

加奈↓柚音
柚音↓加奈
梨沙↓加奈

柚音 「お」

梨沙 「おとお」

加奈 「うげえ」

大熊 「お、二人原田で、(加奈に) ゆずちゃん」

加奈、頷く。

大熊 「まあ、じゃあ、答え合わせ」

柚音 「はい」

大熊 「スパイはくく」

一拍

加奈 「だあああああ！(挙手) やっぱわかるか」

大熊 「原田でした！」

柚音 「はい勝ったああ」

梨沙 「いええええい！」

加奈 「気圧された」

大熊 「気圧されたね」

梨沙 「なんか、意外と加奈って」

加奈 「意外と、なに」

梨沙 「押せば押されるんだね」

大熊 「あくね」

加奈 「うるさいなあ、自分でもそうだなって思ったよ！」

柚音 「かわいいですよ、加奈さん」

加奈 「なんだ、なんだこいつ！」

大熊 「はい、チェンジチェンジ」

大熊と加奈、交代。

●第4ゲーム

GM…加奈

目的…事件の萌芽（梨沙）
スパイ…梨沙

加奈 「くっそく。悔しいな。はい、じゃあ次のセット、あたしがGMで始めます」
梨沙 「なんか加奈率高いね」
大熊 「意外に弱いのかな」
加奈 「うっさいうっさい。はい、目え瞑って！」
柚音 「なんか、荒いですね」
加奈 「いいの、もう4セット目なんだから。サクサクいかないと」
柚音 「かゝわいいゝ」
加奈 「テキトーか！」

柚音、大熊、梨沙、目を瞑る。
加奈、ぐるぐる歩き回る。
加奈、梨沙をタッチ。

加奈 「はいはい、もうオツケーよ」
大熊 「早いな」
梨沙 「サクサクしてる」

一拍

加奈 「じゃあ審議どうぞっ！」
梨沙 「サクサクとね」
柚音 「梨沙さん」
梨沙 「なにい？」
柚音 「スパイ？」
梨沙 「違います！」
柚音 「くまさんはどうですか？」
大熊 「違うね」
柚音 「ホントに？」
大熊 「ホントだよ」
柚音 「くまさんは、鈴木浩一さんの死に関与してないんですね？」
大熊 「してないよ。ん？」
柚音 「ん??？」
大熊 「言ったっけ？」
梨沙 「なにが？」
大熊 「ずっきーが、鈴木浩一だって」

柚音 「あ」
大熊 「知ってたの？」
梨沙 「あ、いや、ウチがさつき言った」
柚音 「そうです、そうですよ！ 言っていました。梨沙さんが」
大熊 「ああ、そうか」
柚音 「です」
大熊 「ふうん」
梨沙 「えと、なんだっけ」
柚音 「ああ。くまさんは、ずっきーさんの死に関与してないんですよ」
大熊 「ぼくどころか、誰も関与してないと思うけど」
柚音 「でも、もちろん知っていましたよね？」
大熊 「何を？」
柚音 「ずっきーさんの死、です」
大熊 「……」
柚音 「知ってましたよね？」
大熊 「え、いや、当たり前だろ」
柚音 「当たり前、というのは」
梨沙 「当たり前だよ」
柚音 「梨沙さん？」
梨沙 「ウチらで行ったキャンプで起きた事故なんだから」
大熊 「(そこ)まで言わなくてもいいだろ、の()おい」
柚音 「ウチら、というのは」
梨沙 「おい」
大熊 「いいじゃん、いいじゃん」
梨沙 「ほお。フルメンツですね。でも、皆さん死んだことには関係ないんですね」
大熊 「無関係だよ」
柚音 「皆さんで行ったキャンプなのに、誰一人として関与してないなんて断言できるとか」
大熊 「できるって」
柚音 「みんなで謀ってるとか」
大熊 「は？」
柚音 「口裏を合わせて、秘密を共有してたり」
大熊 「してないよ」
柚音 「何か疾しいことでもったり」
大熊 「ないって!!」
梨沙 「(大熊に) キレないでよ」

大熊、舌打ち。

柚音 「梨沙さんは」

梨沙 「ウチ？」

柚音 「関与」

大熊 「いいよ、言わなくて。スパイにされるぞ」

梨沙 「なに言ってるんの、ウチ、スパイじゃないから平気だよ」

大熊 「はっ、そうかよ」

柚音 「で？（続きを促す）」

梨沙 「うーんと、あ、BBQしてて……ちょっと待ってね、えーと……」

柚音 「BBQ。ほおほお」

梨沙 「そういえばさ、ずっとスマホいじってたよね」

大熊 「ずっきーが？」

梨沙 「そう」

柚音 「……」

大熊 「覚えてないな」

梨沙 「ウチさ、全然SNSとかやらないじゃん」

柚音 「そうですね」

梨沙 「うん、だからスマホもそんなに頻繁に見ないんだけど、ずっきーはすごいちらちら気にしてて、キャンプにまで来てずっとスマホ見てる、嫌な感じ、って思った覚えあるの」

大熊 「へえ。そうだったんだ」

柚音 「スマホで、何をしてたんですか？」

梨沙 「うーくん、そこまでは知らないなあ」

柚音 「そうですか」

梨沙 「あ、でも」

柚音 「でも？」

梨沙 「ウチらさ、買い出ししてたじゃん？」

大熊 「ん？ ああ、そうだね」

梨沙 「買い出し終わってずっきーと加奈と合流したら、ずっきー全然スマホ見なくなってたの」

柚音 「……なんで？」

梨沙 「さあ？ そこまでずっきーのスマホ事情に興味ないよ」

大熊 「これホント？ 原田」

加奈 「キャンプ場でスマホ見なくなったって？」

大熊 「うん」

加奈 「うーん、さあ、覚えてないねえ」

大熊 「だよなあ」

柚音 「よくそこまでずっきーさんのこと観察してましたね」
梨沙 「いや、ウチがSNSやらないから目についただけだったと思う」
柚音 「好きだったんですか？」
梨沙 「はあ？ ちょっとやだやめてよお。むしろ逆」
柚音 「逆？」
梨沙 「そう、ウチはずっきーのことが好きじゃなくて」
柚音 「へえ。好きじゃなかったんだ。なんで？」
梨沙 「そう、それなんだけど、ウチと始ちゃんは1年のときから付き合ってた、
で、なんかいろいろあったのはあったんだけど、ずっきーが始ちゃんのこと
とを殴ったんだよね。んでウチ『は？』って思っちゃって。だって彼氏のこ
と（殴るんだよ？ 嫌いにならない？）」

梨沙、殴る。

大熊 「痛い、痛い痛い痛い。待った待った」
柚音 「くまさん……？」
梨沙 「（大熊に）なに？」
大熊 「痛い痛い。あと喋りすぎ」

梨沙、驚いた顔で大熊を見ている。

大熊 「（ぼつが悪くなって、舌打ち）あいつは自分で勝手に運転ミスって事故死し
たんだよ。おれたちがあーだこーだ言われる筋合いねえんだよ」
柚音 「くまさん」

大熊、柚音を睨む。

柚音 「だから、それを今ここで審議してるんでしょ？ くまさんがスパイなのか、
梨沙さんなのか」
大熊 「ぼくじゃねえよ。梨沙でもねえ」
柚音 「わたしでもないよ」
大熊 「はあ？」
梨沙 「待って始ちゃん」
大熊 「ンだよおまえまで」
梨沙 「まだ、話は終わってないよ」
大熊 「ああ？ ンだよ話って」
梨沙 「1年になってすぐンときのレクでさ、湖行ったじゃん」
大熊 「……ああ」

梨沙 「そんなときにずっきーが、すごい女の子みたいな声で驚いてたことがあって。キヤーって」

柚音 「なにそれ」

梨沙 「いや、なんか女の子みたいな甲高い声で驚くんだなあ……って思ってた。キヤーって」

柚音 「……はい？」

梨沙 「……うん」

大熊 「え、で？」

梨沙 「なんか、引いちゃったんだよねえ」

柚音 「なんですか、その小話」

大熊 「要は何、嫌いだっただよエピソード？ ずっきーのこと」

柚音 「うーくん……嫌いっていうか、変な人、と思ったのはそれが最初だったっけって」

大熊 「そんなことあったっけか。覚えてないけど」

梨沙 「あつたよ。虫だかトカゲだかが首に止まった、服に入った……とかで大騒ぎ。キヤーって」

梨沙、スベる。

柚音 「ウザ。梨沙さんがスパイだね」

大熊 「だな」

梨沙 「ええええええ、なんでなんで……！」

加奈 「(タイムマーを持つて) あい、おつかれ」

梨沙 「嘘でしょ??!!」

加奈 「いや、終了です。今回は正確に行きますよ。タイムキーパーとして」

大熊 「DMだったりTKだったりGMだったり忙しいな」

加奈 「DMだったことは一度たりともないです」

梨沙 「待って、ウチが最後まで完全に疑われて終わってないコレ??」

柚音 「そうなっちゃいましたね」

大熊 「でも流れだから、流れ。会話の」

梨沙 「作為を感じるうう」

柚音、大熊、顔を見合わせて

柚音・大熊 「いやいやいやいやいやいや」

梨沙 「なにその意気投合！」

加奈 「はいはいはい、じゃあ、梨沙決めて」

間

加奈 「スパイ決めて〜」

梨沙 「嘘でしょ」

大熊 「スパイ、を梨沙って間違えたわけ？」

柚音 「信じられないミスですね」

大熊 「梨沙がスパイで確定ってこと？」

梨沙 「ちよつと加奈、マジですか」

加奈 「いやいやいやいや、ただの言い間違いじゃん。別にスパイが梨沙って決まったわけじゃないでしょ」

梨沙 「うわあ」

大熊 「あれだ、スパイが梨沙って分かってるから」

柚音 「混ざっちゃったんですね」

加奈 「や！ そんなことないそんなことない！！！！」

梨沙 「最悪……」

加奈 「はい！ いいからいいから！！」

大熊 「アイツGM下手か」

柚音 「向いてないですね」

加奈 「はい！！！！（必死）スパイ決めて！」

大熊 「決めるも何も」

柚音 「言っちゃいましたしねえ」

梨沙 「あり得んティー」

大熊 「こいつはこいつで認めちゃってるし」

加奈 「はい！！ スパイは、せーの！！」

柚音↓梨沙

大熊↓梨沙

梨沙↓梨沙

大熊 「自分で指しちやっただよ！」

柚音 「それは諦めすぎでは！？」

梨沙 「いや、だってウチだし」

梨沙、立ち上がる。

大熊 「あやっぱり」

加奈 「ゴメン！！！！」

柚音 「まじかあ」

加奈 「ホントごめん！」
梨沙 「いいです、いいんですよ！ 誰にでもミスはあります（半跏思惟像）」
柚音 「聖人みたいだ」
大熊 「でも梨沙は梨沙で叩かれて『あ』とか言ってるけどね」
梨沙 「誰にでもミスはあるのですよ」
加奈 「あたしこのゲーム向いてない気がしてきた」
大熊・柚音 「ああ」
加奈 「否定してよ！」
梨沙 「（加奈に）ほら、交代ですよ」
加奈 「とっでもごめんね」
梨沙 「ええんやで」

加奈、着席する。

●第5ゲーム

GM…梨沙

目的…事件の萌芽（大熊）

スパイ…柚音

柚音、加奈、大熊、目を瞑る。

梨沙、ぐるぐるぐる。

梨沙、柚音の肩を叩く。

梨沙 「もういいよ〜」

大熊 「かくれんぼみたいに言うな」

加奈 「すみません……」

一拍

大熊 「え、どした」

柚音 「めっちゃ引きずってるじゃないですか」

加奈 「あたし、もう黙っておきます。ボロが出そうなんです。あ、スパイじゃないですよ」

大熊 「え、え、え、え？」

柚音 「ボロが出そう？」

大熊 「もうそれボロじゃない？」

加奈 「え？ ！ あ、違う。深い意味はなくて、黙ってる、ということ」

柚音 「スパイだからですよね？」
大熊 「うんうん」
加奈 「違う違う違う」
柚音 「スパイじゃないんですか？」
加奈 「うん」

一拍

柚音 「くまさん」
大熊 「お、次の標的はぼくかい」
柚音 「そうです」
大熊 「(笑って) どうぞ、何でも」
柚音 「ずっきーさんに殴られたんですか？」
大熊 「……言ってたなあ(梨沙を見て)」
梨沙 「え？ なに？」
大熊 「(無視して) 殴られたことはあるよ、昔ね。1年生のころ」
柚音 「それを後々まで根に持って、殺した」
大熊 「んなことあるわけないじゃん。殴られただけで殺すって、どんなサイコパスだよ。何回も言ってるけど、事故ね、他殺じゃなくて。夜道を運転して、崖から落ちたの。他殺の余地なんてない」
柚音 「加奈さん、これ本当ですか？」
加奈 「え？ ああ、うんホントだよ」

柚音、訝しむ視線を加奈に送る。

加奈 「え？ なに？ あたしも疑うの？ あたしはスパイじゃないよ??」
柚音 「なんで殴ったんですかね」
加奈 「え？」
柚音 「ずっきーさん。くまさんのことを」
加奈 「……」
大熊 「……………」
加奈 「あたしもそれ聞いたことないな」
大熊 「(加奈を睨み) おまえ」
加奈 「いいじゃん、教えてよ。むしろスパイじゃないって示すチャンスじゃない?」
大熊 「なんだよ、それ」
柚音 「教えてくださいよ」
大熊 「なんでだよ!」
柚音 「わたし、気になります! (千反田えるみたいに)」

大熊 「言うかよ」
加奈 「あ、言わないんだ」
柚音 「じゃあもうスパイだつてことで」
大熊 「スパイじゃねえって！」
加奈 「じゃあ言つてよ」
柚音 「なんで隠すんですか」
加奈 「そうだよく くまが悪くないなら言つていいじゃん」
大熊 「別に大したことじゃねえよ」
柚音 「大したことじゃないなら言えればいいじゃん」
加奈 「そうだよ、ここで吐いちやつた方が楽になるぞお」
柚音 「そうだそうだよ」

大熊、舌打ちをする。

大熊 「(加奈を見て) 言つてやつたんだよ、ずっきーに」
加奈 「なんて」

大熊 「(開き直つて得意げに) 『この間、おまえが女と、腕組んで歩いてるの見たぜ。原田より全然下^げだな。あんなのと浮気して、何が楽しいんだよ』」

間

柚音 「……ズサササササ」
加奈 「え、なにその最低発言、引くんだけど」
大熊 「いやいやいや、浮気してたのはあいつだぜ？」
柚音 「でもそんな侮辱みたいなこと言わなくてもいいじゃん」
大熊 「あのさ……ぼくホント嫌なんよ、浮気とか」
加奈 「お？」
大熊 「ぼくの家、父親が不倫しておかしくなったからさ。それで結局離婚したしね、両親」
柚音 「それは穏やかじゃないですね」
大熊 「だろ？」
加奈 「じゃあ、憎かつたんだ。浩一くんのこと」
大熊 「そうだよ！ だから言つてやつたんだよ！」
柚音 「で、その結果」
加奈 「殴られた、つていうね」

加奈、柚音、ポコポコ殴る。

大熊、頷く。

大熊 「『おまえに、おまえに何が分かる……!!』ってね。ぼくあんだけずつきーがキレたの初めて見たよ」

柚音 「温厚だったんですか？」

加奈 「そりやもう、抜群に」

大熊 「『おまえに何が分かる!』はぼくのセリフでもあったけどな」

加奈 「大熊家の家庭のこと知らなかったと思うよ？ 浩一くんは」

大熊 「だろうな」

柚音 「そうか、それでずつきーさんを憎んで、事故に見せかけてズドーンっと」

大熊 「殺してないって!」

柚音 「そうかなあ」

大熊 「ゆずちゃんにはなに、そんなにぼくをスパイにしたいの」

柚音 「そういうわけではないけど」

加奈 「でも、くまってそんなに嫌いだったっけ。浩一くんのこと」

大熊 「いや、別に嫌いっていうか。最初からちよっと苦手意識？ みたいなのは

あつたかな」

柚音 「! そうなんですか。どうして」

加奈 「タバコでしょ？」

柚音 「ああああ」

大熊 「そう、それはある」

加奈 「尋常じゃないくらい吸うもんね」

大熊 「何がうまいんだかな」

加奈 「それこそ、テント建ててるときも結構頻繁に吸いに行ってたからね」

大熊 「あ、そうなんだ」

柚音 「ヘビースモーカーだったんですか？」

加奈 「そりやもう」

大熊 「筋金入りの」

柚音 「そんなに？」

加奈 「どこ行くにも、電車の中でも車の中でも」

柚音 「めっちゃ迷惑じゃないですか」

加奈 「でもマナーは守るよ。吸っていい場所でしか吸わないし、携帯灰皿は持っているし」

大熊 「それでもぼくはタバコ自体、ちよっとね」

柚音 「くまさんて、意外に硬派ですよね」

大熊 「あ？ 悪い？」

柚音 「いや、全然! タバコ吸わないの、いいじゃないですか。でも、苦手だった」

大熊 「……別にいいだろ」
柚音 「だから実はタバコにこっそり睡眠薬なんかを混ぜたりして」
大熊 「してないよ!! BBQのとき、ぼくは本当に何もしてない。スパイの訳がない」

一拍

柚音 「その、BBQってのは、なんですか」
加奈 「? なにって」

柚音 「どんなBBQだったんですか。どうしてBBQだったんですか。そのBBQって
つたい、……いったい何があったんですか!」

梨沙 (タイマーを持って) はい。タイムアップ。お疲れさまでした」

一拍

梨沙 「どう? みんな分かった?」

大熊 「うーん」

加奈 「これわかんないなあ」

梨沙 「ゆずちゃんは?」

柚音 「……………」

梨沙 「ふうむ。まいいか、じゃあ、炙り出す人を決めましたか?」

間

梨沙 「あら。みんな大丈夫か。でも、時間なんでジャッジいきま〜〜す! ス
パイは〜〜? セーのっ!」

柚音↓大熊

大熊↓柚音

加奈↓(迷って) 柚音

梨沙 「お! 加奈と始ちゃん、大正〜解〜!」

柚音 「(立ち上がりながら) ねえ! そんなこと本当にあり得る?」

梨沙 「え?」

梨沙、柚音の座っていた席に座る。

●第6ゲーム

GM…柚音

目的…事件の概要

スパイ…梨沙・加奈・大熊

梨沙、加奈、大熊は俯いて目を瞑っている。

大熊 「そんなことって、なにが」

柚音、ぐるぐる歩き回りながら

柚音

「みんなは、それぞれにずっきーさんを嫌っていた。(加奈に)浮気をされた、(大熊に)浮気をしていたことを指摘したら殴られた、(梨沙に)恋人を殴られた。そんな4人が、BBQに行つて、ずっきーさんが死んだ。こんな偶然あるのかなあ」

大熊

「あるんだよ、事故だったんだから」

梨沙

「そうそう。車が崖下に落ちちゃったの」

加奈

「ガードレールがない道でね。下は川でさ……」

柚音、梨沙、加奈、大熊全員の肩を叩く。

柚音

「もう一回、ちゃんと思ひ出して！ 誰がスパイなのか。あどとき、
2016年の

夏に、あなたたちがしたBBQで何が起つたのか！」

S、キャンプ(セミ、川)

柚音

「目を……開けてください」

大熊、梨沙、加奈、目を開け、顔を上げる。

大熊

「順を追つて話すとさあ……、ぼくが、ずっきーの浮気の問題でずっきーに殴られたのはぼくたちが大学1年の冬、
2015年冬」

加奈

「翌2016年4月、あたしに構つてくれない浩一くんにあたしは愛想を尽かし、別れた。大学2年になつたばかりの春」

梨沙

「もともとウチらのサークルは、同学年がウチらしかいなくてね。その中

で、付き合ったり別れたりってのが、まあよくあるじゃん？ いろんなサークルで。で、やっぱりウチらのサークルでもあって、で、これもどこのサークルでもそうなんだろうけど、疲れちゃったんだよね、そういうのに」

加奈 「そうそう」

柚音 「大学2年生の春にして早速、ですか」

大熊 「まあな。4人しかいなかったし、それだけ回転も速かったんだろうな。疲れの」

柚音、鼻で笑う。

梨沙 「でもねでもね、やっぱり寂しいわけよ。4人しかないのに、ギクシヤクしちやって」

加奈 「別にあたしはよかったけどね」

梨沙 「ええ〜イヤだよ！」

柚音 「で？」

大熊 「それで、まあ、原田とずっきーが別れてから、しばらくぼくら4人はなんかこう、変な感じになっちゃったけど、それを打開すべく開こう！ ってなつたのが」

梨沙 『思うところは色々あるだろうけど、同期4人だけで楽しく過ごしましょうキャン』だったのです！」

加奈 「そんな名前だったの、アレ？」

梨沙 「ううん、今決めた」

大熊 「で、まあ、ぼくと梨沙が中心になって……まあ、ほとんど梨沙か」

梨沙 「ほとんどウチだったよ。ウチが場所とかも決めたんじゃない。BBQできるところがいいね、温泉あったらいいねって」

柚音 「ふうん。それで、いざ段取りも決まって、
2016年秋、くまさんたちが2年生

のときに、決行したわけですね」

梨沙 「そう！」

S、車の音、川、鈴虫

柚音 「どうして、ずっきーさんは事故を起こしてしまったのでしょうか」

加奈 「日没くらいからBBQが始まって……、みんな楽しくやってたけど、飲み物が切れちゃったんだよね」

大熊 「そうだそう。あ、BBQの前に……あれ、ほら、なんだっけ」

梨沙 「なに？」

大熊 「ぼくたちが買い出しに行ったとき」

柚音 「ぼくたちが買い出しに行つたとき？」
加奈 「最初ね、買い出し班と、テントの設営班に分かれたんだよ」
柚音 「ああ」
加奈 「あたしと浩一くんが、設営班。くまと梨沙が、買い出し班」
柚音 「元カレと二人でテント建ててたんだ……」
加奈 「ね、ヤんなっちゃうよね」
梨沙 「えっヒドい。ウチが思い回したのに」
大熊 「余計なんだよ、回し方が」
梨沙 「マーーーージかい（叩く）」
大熊 「あ」
梨沙 「ん？」
大熊 「思い出した！ バケツだ、バケツ！」
柚音 「バケツ？」
梨沙 「花火だ！ そうだそうだ」

大熊、梨沙、加奈、花火をする。

柚音 「なになに」
大熊 「花火を買ったのに」
加奈 「あれ、バケツ……火い消すバケツがない」
大熊 「あ！ 買い忘れた」
加奈 「んで」
梨沙 「あれ、飲み物もないよ」
大熊 「つてなつたから、買いに行かなくちゃつてなつて」
梨沙 「そうそう、BBQ終盤で気づいてね」
大熊 「気付くのおせえよって感じだけど」
柚音 「バケツと、飲み物が不足してたんですね？」
梨沙 「そう、たしかそう」
大熊 「だから、買いに行かないと、つてなつて」
加奈 「でも、お店は川下にあつて、車じゃないと行けなかった」
柚音 「ああ、それで……」
加奈 「え？」
柚音 「お酒飲めなかつたんですね？ ずっきーさん」
加奈 「よく知ってるね」
柚音 「（頷いて）梨沙さん・加奈さん・くまさんはみんなお酒を飲んでいた。だから運転がでなかつた。結果として、お酒を飲んでないずっきーさんが買い出しに行くことになった」
大熊 「その通り」

柚音 「それが、夜の8時半ころ……」
梨沙 「んん、そうだったかな」
大熊 「そのくらいだろ、温泉が閉まるのが10時半とかで」
加奈 「え……ちよっと待って」
大熊 「(柚音のおかしさに気づいて) あ」
梨沙 「ん？」
大熊 「うん、なんで？」
梨沙 「ん？」
加奈 「そう……なんでゆずちゃんが、その時刻を知ってるの？」
梨沙 「あ」
加奈 「ずっきーが8時半にキャンプ場を出たって……」
柚音 「……………」
加奈 「ずっきーがキャンプ場から車でスーパーに向かったのは、ゆずの言う通り、確かに8時半ころなの。でもどうして……、どうしてそれを知っているの？」
柚音 『『どうして?』?』
加奈 「ゆず、いったい何なの? あんた、なに……?」

間

大熊 「ゆずちゃん?」
柚音 「教えますね」
加奈 「え」
柚音 「わたしがずっとずっと不思議だったのは、やっぱり、スマホなんです」
3人 「スマホ?? (首を傾げる)」
加奈 「どういうこと……」
柚音 「警察は事故だと断定して疑わない。アルコールも睡眠薬も検出されていない、まして車のブレーキに細工なんて当然なかった」
加奈 「だから、事故なんだって!!!!」
柚音 「(遮って) 加奈さん」
加奈 「なによ」
柚音 「随分必死ですね」
加奈 「普通でしょ」
柚音 「ふ」
加奈 「なによ」
柚音 「まあいいです。で、スマホ」
大熊 「スマホが、なに、どうだっていうの」
柚音 「警察の人は『8時45分頃、川に落ちた拍子に、スマホも落ちて壊れたんだ』という話でした」

加奈 「それが、どうしたってというの」
柚音 「ありえないんですよ」
大熊 「え？」
柚音 「事故の起こった8時45分に壊れたなんてこと、絶対にありえない」
梨沙 「ごめん、ゆず、よく分からないよ、どうしたこと……？」
柚音 「8時45分より以前、おそらく夕方5時ころには、もうスマホは壊れていた……いや、壊されていたはずなんです」
大熊 「え」
柚音 「あなたたち誰かの手によって。ねえ？（加奈を見る）」
加奈 「なにそれ、なんでそんなことが言えるの」
柚音 「そういう傍証があるんです」
加奈 「しかもなに、仮に柚の言う通りスマホが壊されてたら、だったらどうだったというの？ だからずっきーは事故死じゃなかった、他殺だった、とでも言いたいのか？」
柚音 「それは……」
加奈 「何よ、黙らないでよ」
柚音 「おそらく事故死という事実は変わらないと思います」
加奈 「でしようね、だって事故だもん」
柚音 「でも！！」
加奈 「……なに」
柚音 「もしスマホが壊されていなければ、崖下に落ちたときも自分のスマホで連絡を取ることができたと思いませんか……？ 即死じゃなかったんだから」
大熊 「それも……即死じゃなかったっていうことも、よく知っているね」
柚音 「……ええ、知ってますよ」
加奈 「なに、なんなの、何がしたいの」
柚音 「わたしはただ、真実が知りたいだけです。彼がどうやって死んでいったのか」
梨沙 「……ゆず、もしかしてあなたずっきーの」
柚音 「（タイマーを持って）時間です」
大熊 「あ」
梨沙 「あ」
柚音 「……では、スパイを決めてください。せーのっ」

暗転

2016 年秋。浩一、大学2年生。柚音、高校2年生。

出発準備をしている浩一。旅行の荷物を持っている。スマホを持った柚音がやって来る。腕にはリストカットの跡を隠すような包帯が巻かれている。

浩一、スマホの充電器を入れる。
大量のタバコ（5カートンくらい）

浩一 「充電器もよし。タバコもよし、と」

柚音 「タバコそんなに!？」

浩一 「え、ああ」

柚音 「吸いすぎダメ!」

浩一 「分かってるよ」

柚音 「気をつけてね」

浩一 「1日1カートンくらいにしとくって」

柚音 「それくらいにしてね」

浩一 「うむ……なあ、おれ行っているのか?」

柚音 「ええ……? 今聞くの?」

浩一 「やっぱり行かない方がいいか?」

柚音、不安そうな表情。

柚音 「そりゃ、まあ……」

柚音、浩一に縋りつく。

柚音 「行かないでほしいよ」

浩一、少し困ったような表情で

浩一 「2泊3日だもんなあ」

柚音 「長い!」

浩一 「うむ」

柚音 「長い! 長い長い長い長い……」

浩一 「分かった、じゃあ行かないよ」

柚音 「いや、行きなよ!」

浩一 「え、どっち?」

柚音 「行ってほしくないけど、いいの? サークルの人たちが企画してくれたん

でしょ？ せつかく」

浩一 「まあ」

柚音 「迷惑かけたかもしれないでしょ？」

浩一 「うん」

柚音 「じゃあ行ってきなよ」

浩一 「いいのか？」

柚音 「行きたいんですけど？」

浩一 「……まあ、多少は」

柚音、浩一の頭を撫でて

柚音 「行きな」

浩一 「いやでも、おれがいない間に自殺でも」

柚音 「しないわ」

浩一 「じゃあ、1時間に1回は連絡を入れるから。必ず」

柚音 「過保護だなあ」

浩一 「だから、返信しろよ」

柚音 「わかった。ヘンシンするね」

柚音、体で大きく「2」を描く(変身)。

浩一 「(柚音の体の動きに合わせて)へーんしん、うん、しろよ」

柚音 「分かったよ……。ありがとう。心配してくれて」

浩一 「……じゃ、行ってくる」

柚音 「うん、行ってらっしゃい」

浩一 「行ってくるよ」

柚音 「行ってらっしゃい」

浩一、行こうとする。

浩一 「おれ、本当に行くからね！」

柚音 「早く行けよ！」

浩一 「浩一、行きまー！ーす！」

浩一、ハケる。

柚音 「行って来い！」

浩一 「(戻ってきて) うん！ 行ってくるよ」

柚音 「戻ってくんない！」

浩一、ハケから覗いている。

柚音 「早く行けよ！」

浩一、ハケる。

柚音 「まったく……」

柚音、暇を持て余す。

S、着信音。

柚音、スマホを見る。

柚音 「みんなと合流しました。これからくまの運転でキャンプ場に向かいます。

……写真まで。いいなあ、楽しそう」

柚音、しばらくしてスマホを投げ出す。

柚音 「いいなああ！ いいなああ！！ いいなああああ退屈。一人つまんない」

柚音、ハケる。

S、着信音。

柚音、戻って来てスマホを見る。

柚音 「……ちゃんと1時間おきに（笑って）律儀だなあ。この人がクマかあ。わ

あ、くま目つき悪くい。（返信して）お土産、絶対買って来てよ……」

S、送信音。

S、着信音。

柚音 「キャンプ場到着！ ほおお……結構整備されてんじゃん。しかし……全部

タバコ吸ってるなあ。楽しそう。（返信して）タバコ吸いすぎダメ、絶対！」

S、送信音。

柚音、寝てしまう。

L、夕刻。

S、夕刻に街に流れる音『新世界より』。カラスの鳴き声。
柚音、目を覚ます。

柚音 「！ やば。(スマホを見て)こんな寝てた。……………あれ、連絡が来てない。
まあ、楽しんでるのかな」

柚音、スマホを置いて、きよろきよろ。なんとなく服の匂いが気になって

柚音 「なんか汗臭いかな……シャワー浴びなきゃ」

柚音、手首の包帯を外すと、リストカットの痕。
L、暗転

●断章 2-2

梨沙、加奈、大熊に囲まれた中央に、柚音が立っている。
柚音の腕には、リストカットの痕。

柚音 「わたしは、いじめられっ子だった。高校1年生のとき。わたしの家庭のことで色々と言われて、一度、クラスでキレてしまった。水筒のお茶で体操着をびちょびちょにされたり、筆箱をトイレに捨てられたり、生理用品をびりびりにされて机に詰め込まれたり……。でも、わたしの家には相談する人がいなかった。やつらは、それを知ってるから、あんなことができたんだね、今思えば。親がない、つてことは隠してなかったけど、皮肉にも、それがいじめを助長してたんだと思う。学校に行くのも辛くて、登校前になるとお腹が痛くなって耳鳴りがした、げえげえ吐いた。でも、おにいちやんに知られるのが怖くて、恥ずかしくて、学校にはちゃんと行った。心を無にして、行った。でも、感情を無くすはできないでしょう？ いじめられたら辛いし、憎いし、それより先に体が反応する。学校でも吐きまくった。ご飯が喉を通らなくなった。心が潰されそうになったときに、そうならないようにする最後の手段が、実によくあることに、自傷行為、だった」

柚音 「自傷行為って、よく気持ちいいからって言うじゃないですか。あれ、嘘ですよ。自慰行為じゃないんだから。気持ちよくなって満足なら、毎日オナニーでもしますよ。自傷行為は、自慰行為とは根本的に別！ してないと、(カッターを取り出す)自分が自分じゃなくなっちゃう気がするんです！ 自分の心を、自分の体に繋ぎ留めておくために、するんですよ(腕を切る)！ だ

から気持ちよくなってるし、痛いですよ!!!」

浩一、現れて慌てて止める

浩一 「なにやってんだ!!!!!!」
柚音 「!!!」

浩一、柚音の腕を押さえる。

柚音、抵抗しない。カッターを渡す。

浩一 「(腕を見て) ……こんなになって」

柚音、俯いている。

浩一 「いじめられてるんだろ」
柚音 「うわ、ストレートく。デリカシー〜」
浩一 「いじめられてるんだろ」
柚音 「……(小さい声で) うん」
浩一 「いつから」
柚音 「……1学期始まって、すぐ」
浩一 「……」
柚音 「なに？」
浩一 「別に」
柚音 「はあ？ なに、聞いておいて『別に』って」
浩一 「(言うに困って) く、耐えたな」
柚音 「は？ 耐えてないから切ったんじゃない」
浩一 「(カッターを見て) 確かに」
柚音 「余計な慰めしないでよ」
浩一 「おれもどう言えればいいか分かんない」
柚音 「じゃあ余計なこと言わないでって、腹立つから」
浩一 「でも止めないわけにもいかないだろ、目の前でリスカされたら」
柚音 「知らないよ」
浩一 「いや、おまえのことだから。知れよ」
柚音 「なに？ 何様？」
浩一 「お兄様だよ」
柚音 「キモっ。義理のくせに」
浩一 「キモかろうが義理だろうが、兄だからなあ」
柚音 「だから何よ」

浩一 「妹……ラブ」
柚音 「(溜息) あくあ、変な兄」

浩一、カッターの刃を出して自分の腕を切ろうとする構え。

柚音 「え、なに、なにすんの、切るの？」

浩一 「切ったら、どんな感じかなと」

柚音 「痛いに決まってんじゃないん」

浩一 「痛いのに切るの？」

柚音 「痛いから切るの」

浩一 「なんで……？ 血出るし」

柚音 「知らないよ」

浩一 「だから知らないって……。切ってるの自分じゃん」

浩一、刃を腕に当てる。

柚音、驚いて止める。

柚音 「ちよっ！！！！」

浩一 「やらないよ、うるさいなあ」

柚音、「は？」の表情。

浩一、刃をしまつて立ち上がり

浩一 「(溜息) 一回病院行くこうか」

柚音 「え」

浩一 「心療内科」

柚音、黙っている。

浩一 「おれも行くから」

柚音、黙っている。

柚音 「彼女に見られたらどうすんのさ」

浩一 「はい？」

柚音 「病院行くときに」

浩一 「家族の通院に付き添うだけだぞ」

柚音 「だって……かまってちゃんなんですよ？」

浩一 「まあ」
柚音 「誤解されたらイヤだよ、わたし刺されちゃうじゃん」
浩一 「そんなヤンデレみたいな」
柚音 「違うの？」
浩一 「メンヘラのくせに〜」
柚音 「は、メンヘラじゃねえし」
浩一 「手首切ってる」
柚音 「手首切ったらメンヘラか」
浩一 「そうでしょ」
柚音 「は、ちげえし」
浩一 「あ、カッター、洗ってくる（ハケる）」
柚音 「ちよ、わたしのカッター、返せよ！」

浩一、ハケる。

柚音

「おにいちちゃんの提案で、カウンセリングに通うようになった。抗うつ剤や睡眠薬、昇圧剤を何種類ももらった。学校も休んだ。わたしは、イジメに負けることを選んだ。でもそのお陰で、体調もゆっくり回復して、少しずつ精神も安定してきて、高1の冬には、ほとんど正常に登校できるようになった」

●続・第6ゲーム

大熊、加奈、梨沙、起きる。

柚音

「せーのっ」

大熊↓加奈
加奈↓梨沙
梨沙↓大熊

大熊 「おっ、割れた」
加奈 「割れたねえ」
梨沙 「ウチじゃないよ」
加奈 「そりゃ分かんねえよ」
大熊 「間違いないね」
柚音 「はいじゃあ、本当のスパイは、だくれ！」

大熊、加奈、梨沙、見合って、同時に挙手。

加奈 「あれ？ あれあれあれ？？」

大熊 「おまえも（梨沙に）」

梨沙 「二人とも？」

加奈 「梨沙もじゃん」

梨沙 「それな」

大熊 「え、待って。おれ、コイツ（梨沙）はそうだろうなあ、って思ってた……
っていうか知ってたけど、原田もなん？」

加奈 「そう……だねえ」

梨沙 「ウケるじゃん。卍じゃん」

大熊 「何したん？」

加奈 「ずっきーに？」

大熊 「おう」

加奈 「あたしは、実は……」

大熊・梨沙 「おお」

加奈 「あいつのケータイを……」

大熊・梨沙 「おおおお」

加奈 「水没させました」

大熊 「わ、えっぐい」

梨沙 「えぐいですよ！」

加奈 「違うの違うの。聞いて」

大熊 「なにになになに。聞いてやろう」

加奈 「だってさ、あれって元々あたしたちが改めて仲睦まじく過ごしましよ、
つてためのキャンプだったでしょ？」

梨沙 「うんうん」

加奈 「なのにあいつさ、なんかもう、テント建ててるときとか料理してるときも
さ、なんかずっとスマホいじってたの」

大熊 「ああ、なんか言ってたね」

加奈 「そうそうそう！ ずっとスマホいじった」

浩一、出てくる。

柚音と浩一だけ、目が合う。

加奈 「で、あんまり見てるから『誰と連絡取ってたんの？』って聞いたら、もうわ
ざとらしく、（ジェスチャーを交えて）ささーーと隠して『なんでもな
い』って言うから」

大熊 「女だ」

加奈 「そう思うよね！」

大熊 「違うの？」

加奈 「あたし絶対そう思ったんだけど、いやちよっとき、立場的に聞きづらいじやん？」

大熊 「あああ」

梨沙 「え、なんでえ」

浩一 「スマホ、壊れてたんだよな」

柚音 「(俯いている)……」

大熊 「ばっかおまえ」

加奈 「なんか浩一くんのこと引きずってるみたいに思われそうじゃん」

梨沙 「！ ああ！」

加奈 「だから、これはもう女だ、っていうかたぶん、あたしと付き合ってるときに浮気してた相手だと思って」

大熊 「おおお」

加奈 「連絡なんて取らせてなるものか、ってことで、もう(ケータイを捨てる素振り)ドボンよ、ドボン」

梨沙 「ひえええ、女こえええ」

浩一 「加奈ちゃんが、壊したのか(苦笑) どおりで連絡できなかったわけだ」

柚音、呆然。

浩一 「(柚音に)ごめんな、連絡途中からできなくなって」

柚音 「うん」

浩一 「いや、おれもしたかったんだけど、タバコ吸って帰ってきたら急にスマホが点かなくなってる焦ったわ」

柚音 「うん」

浩一 「崖から落ちたときも、助け呼ぼうとしてスマホ出したら『あ、そうだ点かないんだ』って気づいてもう、お手上げ」

柚音 「うん」

浩一 「うん、て」

柚音 「うん」

浩一 「なに……悲しいの？」

柚音、俯く。泣いているようである。

浩一、参ったなあ。

柚音 「(小声で)ごめんなさい」
浩一 「え？」

加奈 「ご飯の準備してるときにね、ちょっと手が滑ったふりして」
大熊 「よくバレなかったな」
加奈 「や、あたしのはいいよ。(二人に) 何したの？」
梨沙 「ウチら大したことないよ」
加奈 「え」
梨沙 「(大熊に) ねえ？ ケータイドボチョに比べたら」
加奈 「でも、ゆうてもスパイでしょ？」
大熊 「まあねえ(梨沙を見て)」
梨沙 「ウチはく。ああ、ずっきーってへビスモじやん」

し、溶暗していく。
白い花びらが降って来る。

加奈 「ああ、そうねえ。わりとスパスパ吸ってたね」
梨沙 「だから、タバコの箱に、トカゲ入れた」
加奈 「うっそ」

浩一 「あゝ(苦笑)」
柚音 「え？」

梨沙 「絶対驚くでしょ？」
大熊 「えぐいわあ。ずっきーそういう爬虫類とか虫とかチョー苦手じゃん」
加奈 「あのね、ケータイジヨポンより」
梨沙 「ドボチョ、ドボチョ」
加奈 「ああ、ケータイドボチョより数段えぐいからね」

浩一 「あれは驚いたね。タバコ空けたら、なんか出てきたんだもん。トカゲだったと」

柚音 「それで……？」
浩一 「それで、ハンドルをミスったね(笑う)」
柚音 「何へらへらしてんの!??」
浩一 「……えく?(へらへら)」
柚音 「あんた、それで死んだんだろよ？」
浩一 「死んだよ」
柚音 「なんでそんなへらへらしてられるの! あんな、あんなくだらない悪戯で」

死んだんだよ！」

浩一 「ホントくだらないねえ、真相を知れば肩透かしだ。マジックの種なんて知るもんじゃないね」

「ねえ」

柚音 「ん？」

柚音 「なにそんな冗談みたいなの」

浩一 「冗談みたいなのもんでしょ、こんなの」

柚音 「……は？」

浩一 「死んじゃったからさあ、もう別に怒るとかないよ、おれは。ああ、柚音には悪いけど」

柚音、固まる

柚音 「なんで怒らないの！？ 怒りなよ！」

浩一 「えええ、めんどくさい」

柚音 「めんどがるなよ！ 自分のことだろ！」

浩一 「でもめんどいよ！ 生き返るわけじゃなし」

柚音 「おにいちゃんの人生、そんなもん？？」

浩一 「は……い……いやあ、そればかりは死んでも分かんないね」

加奈 「ってかなんで梨沙が浩一くんおどかすのよ」

梨沙 「ええええ、だって始ちゃんのこと殴ったんだよ。ウチそのことは今でもどうかと思ってるからね」

加奈 「女こわ！ もう死んでるのに……」

梨沙 「あ、ほんとだよ。ウチめっちゃ性格悪い女になってる、ウケる」

加奈 「ホントだよ」

大熊 「じゃあぼくが一番ソフトだよ」

加奈 「何したの？」

大熊 「したっていうか、してないっていうか」

加奈 「なに」

大熊 「さっき、バケツ無かったって言ったよね。飲み物も足りなくなったって」

加奈 「うん、なんか言ってたね」

大熊 「わざとなんだよね」

梨沙 「え、ドユコト」

大熊 「だからもうさ、おまえ酒飲んでないんだからスーパーまで買って来いよ！
って言うために？」

加奈 「ええ、ただの嫌がらせじゃん」

大熊 「はあ？ ケータイボトン」

加奈・梨沙 「ケータイドボチヨ」

大熊 「おうケータイドボチヨとかタバコトカゲとかよりは良質だと思うけど、これ言い直させる必要あった？」

浩一 「大熊（苦笑）」

柚音 「ねえ……こいつら、許せないよ」

浩一 「なぜ」

柚音 「は？」

浩一 「こいつらが、おれを殺したか？」

柚音 「殺したじゃん！！」

浩一 「（静かに首を振る）NO」

柚音 「は？ だって、酒買わせに行かせて」

浩一 「（継いで）スマホを水没させて、タバコにいたずらした」

柚音 「そう」

浩一 「いや、偶然、だろ」

柚音 「は??? 何言ってるの？」

浩一 「大熊はただ酒を買いに行かせただけ、たまたま同じタイミングで梨沙はタバコにいたずらをし、たまたま加奈ちゃんはケータイを水没させただけ。偶然なんだよ、おれが死んじゃったのは」

柚音 「一つ一つは、取るに足らないことだから？」

浩一 「さすが！」

柚音 「でも、でも……」

浩一 「殺意があったわけでもない、3人が謀略したわけでもない。まったく独立に、いたずらしたり嫌がらせしようとした結果……おれは、偶然、死んじや

柚音 「たんだよな。うくん、運が悪い（ハケる）」

浩一 「でも、でもさあ……。わたしが、おにいちゃんと病院に行っちゃったりしたからでしょう？ おにいちゃん……おにいちゃんに、『行ってきなよ』なんて言っちゃったからでしょう？ だからおにいちゃんは、逆恨みを買って、……殺されたんじゃないの」

柚音 「いやでもねえ、浩一くん人がいいからね、それ嫌がらせだって受け止めてない可能性あるよ」

大熊 「だから、それも含めて良質な嫌がらせなんだろうが」

梨沙 「何より、ちゃんと考えてんじゃない（どつく）」

大熊 「ぼくはいいやつなんだよ」

梨沙と大熊、じゃれる。

加奈 「おい、いちやいちやすんな」

梨沙、今更になって柚音が黙っていることに気が付いて

梨沙 「ゆず？ どうしたのさつきから黙って」

柚音 「……」

大熊 「ゆずちゃん」

加奈 「ゆず？」

大熊 「どうしたんだよ」

柚音、絶叫。「クソクソクソクソ」などと叫んでいる。

柚音 「わたしも……わたしも、スパインなんだよ!!!!!!」

し、暗転。

●エピソード

柚音が花びらの落ちた舞台上で寝ている。椅子の上には浩一のケータイ。

浩一は柚音の様子を見ている。

柚音、じっとケータイを見つめる。

柚音、起き上がってケータイを取る。電源を入れようと試みるも、点かない。

柚音、浩一のケータイをいじくりまわす。

浩一、柚音の傍に寄る。

浩一、ケータイに魔法をかける。

浩一、ハケる。

S、着信音

柚音 「わっ！」

柚音、驚いて浩一のケータイを手放す。

柚音 「びっくりした〜」

柚音、ポケットから自分のスマホを取り出して出る。

柚音 「あ、もしもし〜？ くまさん？ お久しぶりです！ 加奈さんと梨沙さん

もいる？ あ、よかったー！ りよーかいですっ！ 分かってますよ。大丈夫だってば。(にやっと笑って) ふふ、楽しみにしててくださいね。本当に……」

柚音、ハケる。

終わり